

# 漂泊無限

松隈義勇

—『おくのほそ道』の結び 大垣の章—

昭和五十六年秋、その日は快晴であったから、日の照るにまかせて美濃大垣の町のすべてはくっきりとした影を刻んで、しっとりとした古い町らしい落着きを見せていた。

西のかなたに連峰をぬきんで聳える秀峰伊吹山は、今日は秋霞に包まれて眠っているようであった。

市内ではまず奥の細道結びの地に行った。かつて芭蕉が旅の疲れを癒す程もなく伊勢へ向って再び旅立って行った、その船出もここからしたのである。船を浮べた水門川には、みどりの黒髪のような藻がゆらめいており、その間に鯉の姿が見える。古風な吉舟がもやもやしている。雨の日の風情が思いやられる。東の岸べに住吉神社の社殿が見え、その裏手に灯台の役をしたという住吉灯明台が黒っぽく立っている。

西岸の高橋の袂に「史蹟船町港跡」の石標が立つ。水門川の舟行の記念である。芭蕉関係の石碑類はこの石標の背後の園地内に集められている。まず「史蹟奥の細道結びの地」の石標。その後ろに「甬いせくわなへ十里さいがうみち」と刻んだ道標、これは貞享五年に訪れた芭蕉を歓迎する気持を込めて谷木因が立てたものである。道標の左手後ろに、菱形の自然石の中央を円形に磨ぎ出して、

「い勢にまかりけるをひとの送りければ」の前書と「はせを」の署名を入れ、芭蕉の筆跡の書体を模した「蛤のふたみに別行秋そ」を刻んだ、いわゆる「蛤塚」がある。そのほか、木因句碑「白桜塚」や、「連句塚」などが所狭しと立ち並んでいる。「連句塚」は横長板型の自然石に、木因・如行と芭蕉との間の別離吟を前書と共に刻んだものである。杉風宛（推定）書簡に拠ったものであるが、この中の芭蕉の句が「蛤のふたみへ、別行秋そ」となっていて、これが初案形かと思われる。

木因の家は道路を挟んで西側角に立つ徳田ビルディングの所にあったという。すぐ前を水門川に合流する杭瀬川（セは清音に呼ぶ）の分流が流れていたもので、木因は自ら「杭瀬川の翁」と呼んだ。木因亭跡から大通りを西へ進んで十分程の所にある正覚寺という寺に元禄七年に建てられた古い芭蕉追悼塚（尾花塚）がある。塚の左側の「木因墓」と誌された小さな質素な墓が木因の墓である。木因は船問屋の主で、北村季吟門下の大垣俳壇の雄であった。芭蕉のいわゆる野ざらしの旅は木因を訪れることを目的として思い立たれたもので、この時その手引で桑名・熱田などを巡遊し、入門者を得て蕉風確立の基礎が成ったのであって、いってみれば大垣は蕉風発祥の基

地であり、木因はその東道をなした盟友であった。

「結びの地」の所から水門川に沿う西岸の道を北へ行く。興文小學校をはさんで、宮崎荊口・津田前川・中川濁子など大垣藩士蕉門俳家の邸跡が並ぶ。その先の道が四叉路になる角地の、駐車場 buildingsのある所が、芭蕉が泊った近藤如行亭の跡だという。

さてこのように遺跡を手順よく巡れたのも、当地在住の研究家大野国比古氏の懇切な教示をいただいたおかげであって、今日も同氏邸の門を叩いて直接の示教を受けてきたのである。大野氏は大垣における芭蕉の事蹟についての研究の第一人者として知られている。同氏からは特に赤坂の虚空蔵さんに行くことを奨められた。これは大垣の市街から西北に当る中山道の宿駅赤坂（現大垣市赤坂町）にある金生山の山頂にある明星輪寺宝光院という寺のことで、虚空蔵菩薩を本尊とする。芭蕉の詣でた霊場である。赤坂の町並から左へ折れて金生山へ登る。標高僅か二一七メートルであるが、平地から急に高くなっている、眺望がきく。全山石灰岩から成り、白っぽい奇岩怪石に富む。古びた仁王門に辿り着いたら、そこに真新しい句碑を見付けた。この山産の太湖石（石灰岩）に花崗岩を嵌め込んだきれいな碑である。（下部に昭和四十七年建立とある。）碑面には、

鳩の声身し入まわたる岩戸哉　はせを

の句が刻まれている。

境内は樹木鬱蒼として静寂そのものである。ヒガンバナがあちこちの日向に朱を点じている。奥の院に当る古びた本堂の奥は暗くて、内陣と思われる辺全体はでこぼこのある白ばんだ巨岩（石灰岩らしい）である。白象の巨体がうろくまらずくまらずで、異様な感じであ

る。微かな灯光で見ると、その岩の中央部の洞穴様の龕は扉で閉ざれている。堂守の僧にきくと、秘仏の本尊はここにおさめてあるという。「鳩の声」の句の「岩戸」とはこれだなど合点がいった。実際に来て見たおかげで初めてわかったことである。

句意は、本尊をおさめる岩戸の前の暗がりにぬかずいていると、秋風と共に、山鳩の声がぞっとするほどに冷たく、凄く、又畏ろしく身に沁みわたる、というふうなことであろう。佳句である。この句についてはなお言いたいことがあるが、別稿に譲りたい。

この句の前書に「赤坂虚空蔵にて、八月二十八日、奥の院」とあり、これによって芭蕉の大垣入りは八月二十八日とされてきたのであるが、大野氏の発見にかかる『荊口句帳』所収の路通の序に「元禄己巳中秋廿一日以来大垣庄株瀬川辺」（廿一日の「一」は「八」とも読めるが、「一」説が優勢）とあり、これによれば、芭蕉の入垣は八月廿一日ということになり、虚空蔵参詣は旅の途次でなく、日を改めてのことと思われる。なお因みに芭蕉入垣の道筋について通説では、教賀まで出迎えた愛弟子路通の導きで、北国協街道を取ったのだらうと考えられている。

八月廿一日に着いたとすると、大垣滞在は約半月間ということになるが、この間門弟等の諸家に招かれて、俳席などあったことが伝えられている吟詠によって知られる。中でも斜領亭で発表された、「孤山の徳あり」と伊吹山を称える前書を持つ、

そのまゝよ月もたのまじ伊吹山の句は、挨拶吟ながら佳吟である。

芭蕉の旅の疲れを癒そうと、心をこめて按摩をしてくれた鍛冶工の竹戸に、旅中携えてきた紙衾かみずまを与えたということもある。大垣藩

家老格の戸田如水に招かれたりもした。大野氏によって紹介された『如水日記』は、その中に、この時の芭蕉の風采・人となりに触れた記録があることをもって有名である。

以上でうかがえる、大垣における記事になり得るような出来事が『おくのほそ道』の本文には殆ど載せられていないが、それには何か理由があるのか。その所が本文を読み解く手がかりになりそうに思えた。だがその前に考えておきたいのは大垣をなぜ結びにしたかという問題である。

概ね蕉風の成立圏といったものを考えると、江戸は別として、京都から湖南、そして美濃から名古屋という風に辿られ、南に少し外れて伊賀上野がある。こういう圏内の中心近い位置を大垣が占めている。それからあらぬか、大垣は蕉風発祥の基点となった。それにこの地は山紫水明、特に水は豊かで美しいし、人情は篤く穏かで、ゆかしい城下町である。同じ城下町である芭蕉の郷里伊賀上野へもそう遠くない。芭蕉にとっては故郷の感じのする所であつたらう。

この故郷のような所というのがまず結びの地として必須の条件である。なぜなら、本当の故郷や又は居住地であれば、旅は名実共に終了したことになり、それでは中心テーマである常住漂泊（無所住の漂泊の境涯に常に止住する意）、無限漂泊のたてまえは解消される。

かといつて、北陸路など旅の途上の地であれば、結びとはなし難い。旅が終つたと見えて、終つていない土地でなければならぬ。

それはつまり故郷と思える所で故郷でない土地ということで、大垣が最もその条件に叶っている。故郷に比せられるような所に帰入することによって、旅は終つたと見えながら実質の故郷でないゆえに

その地に在ることもまた更に無限に続く旅の途上である、というようにして、一編を結ぶのが一番理想的なわけである。

もともと芭蕉は一編の作品において終りの部分の文章を軽くしようという気持をもっていたように思えるが、これは芭蕉の頭に連句構成の呼吸があつたことによるのではなからうか。『おくのほそ道』の構成については諸説あるが、序・破・急と見るか、初表・初裏・名残ノ表・名残ノ裏と見るか、いずれにしても急ないし名残ノ裏に当る越後路以降の筆づかいの軽く速くなっているのを見れば、連句的構成であることを認めざるを得ない。とすると、連句の挙句に当る最終部はとりわけて軽く仕上げようとするはずであらう。

ところが一般的にいって結びには必要な条件がある。例えば改めて主題を印象づけるようにすること、発端との照応を考えることなど。文章表現を簡潔なひきしまったものにすることも勿論大切である。更にここでの場合には、旅は一応終りながらも又無限に続くように印象づけることも必要である。相背反するものまでである、そういう諸要求を芭蕉はどう取捌いたか。苦心の結果が結びの文章になつたのだと思う。省筆を旨とした簡潔な詞句の中に、さりげなく重要な必須の事柄を敲き込むようにしてある。必然的に大垣の記事では具体的な事は切り捨てられた。残されたのは必要欠くべからざる、ぎりぎりの文辞・文章である。そういう視点で本文について検討を加えてみよう。

まず本文所載の人名について。主たる随行者で、北陸路から別れて姿を消した曾良については、最後の場面に、名前だけでも登場させることが是非必要であつた。それが現実には駆け付けて来たので

あつて、これで結びの要件の一つは充された。曾良は芭蕉とほぼ同じ道筋を歩き、大垣に寄つた後、伊勢長島で静養していたのである。それから藩士俳家の代表格で宿主でもあつた如行、藩の要職にあつた前川、父子四人打揃つて蕉門に名を連ねる荊口父子、これらをもつて藩士を主とする大垣俳壇を代表させることは至当である。

ただ谷木因の名は逸すべきでないのに、これが見えないのは不審と言うほかない。そこで作品執筆時の不仲説など各種の見解が出されてはいるが、要するに憶測の域を出ない。大垣蕉門発祥の大本となつたようなこの人は俳友というべきで、門弟あつたかも知れない所があり、文章が膨れ上る恐れがあつたので、やむなく「その外ししき人々」に含めてしまつたのではあるまいか。作品の構成上からいえば、木因の名はあながち出さなくてもすむわけである。

木因の名まで省いてしまふほどの切詰めようだというのに、この作品としては初出の露通と越人の名が章ののっけから出るのは、当を失したようで奇異の感さえ受ける。門弟中格別に目をかけていたこの二人が出迎えてくれた喜びがそうさせたのであろうか。露通（正式には路通）は奥羽の旅の随行者として当初予定されていたということもあるし、作品執筆時に勘当されていたということもあつて、それゆゑに敢えて名を出して真情を示したとも思える。越人も同じ時に勘当されていたという。しかし表現上から言えば、これのみが具体的に述べられた、愛弟子の参集の叙述は、旅後師弟交驩の記事を盛り上げるにあずかつて力のあることは確かであつて、無用の贅筆では決してない。なお「路通」を「露通」と書いたのは本名を憚つたとも取れるが、章の冒頭に出すには「露通」の方がどつし

りとすわるし、又「露」にはこの折柄の秋季に相応する風情もある。

本文中の重要な二、三の文辭に触れてゆくことにする。まず「蘇生のものにあふがごとく」である。連句の挙句には祝言いづかひがあつた方がよいといわれるが、この一節には祝言の心持が込めてあるようである。だがそれだけでなくて、これは辺土異境の漂泊が死の色を帯びたものとして描かれてきたことの総決算でもある。旅することを己が定業と観ずる思いを初めに述べてから、旅の艱苦をば野ざらしたることの予兆として書き進んできた後に、生命を完うして旅を終ることができた歎喜感激を表わすには、まさに蘇生の思いというのがびつたりであらう。しかし主人公の側から蘇生の思いであつたなどと手放しで喜びを叙することは、風狂漂泊の俳諧師のたてまゑとしてふさわしからぬ所である。そこで話主自らの主観から離れて、迎える者の側から「蘇生のものにあふがごとく、且喜び且いたはる」と叙したのである。それによつてその思いに客観性が付与され、重みを増す点に注目すべきである。

「且喜び且いたはる」ではっきり切れ目になつて一段落しているが、そこまでは結びとしての迫力はない。その後の次の一節が結びとしての眼目である。——「旅の物うさもいまだやまざるに、長月六日にもなれば、伊勢の迂宮おがまんと、又舟にのりて」。

論を進める都合上、「伊勢の迂宮」のことから述べる。伊勢皇大神宮は全国の神社の大宗であるから、参宮はこの作品中に頻出する神社仏閣参拝の総締め括りといふべき意味をもつ。それにこの年は二十年毎に行われる式年御遷宮の年に當つたが、この神事は、皇大神のよみがえりを意味している。死の旅からよみがえり帰つて、又新しい旅に出で立とうという主人公の情況にきわめて似つかわしいと見

えるが、これは偶然の暗合なのであろうか。なお含みとして、伊勢が西行と縁の深い地であるということもあろう。伊勢へ行くには水門川を舟で下り、本流の揖斐川に出、長島で下船したのであるから、「舟にのりて」という言葉が直ちにすらりとこれを受けるのである。

「旅の物うさもいまだやまざるに」は話主自身を突っ放して客観視する叙法を取っている。これによって、一つの人間像を客観的に描き出すことができ、それを自画像として、自らの漂泊癖を笑い揶揄するポーズを示して、俳諧独特の味を出している。

しかしこの詞句は、文脈の上で直接には「又舟にのりて」に係るのである。「又舟にのりて」はいかにも短く、事実在即しただけの、乾いた何気ない措辞と見えるが、ここにはまことに適切である。というのは、往昔の舟旅は心細い遠い旅を暗示するものであり、漂泊という語にもびったり合っている。「又舟にのりて」の「又」とは、直接には序章の「漂泊の思ひやまず、海浜にさすらへ」や、旅立ちの「舟に乗て」深川を出発したくだりなどに照応させて言ったものと解せられる。しかし「又」は必ずしも前にあった具体的な事に対して言うとは限らない。この場合舟に乗るを旅に出るといふことの提喩法表現と受取って、「又舟にのりて」を又々重ねて旅に出るといふ意味に解してよいと思う。つまり、重ねてきた漂泊を今から又限りなく続けるのだという心持を感得することができる。

さて「旅の物うさもいまだやまざるに」は自分の姿を客観視してこれを揶揄している自嘲ともいえる語調があると云ったが、「に」という逆態接続の助詞を介して下に、特に「又舟にのりて」に係っていく文脈には、必ずしもそうとはかりとも言えない、深沈とした

重苦しいものが潜んでいるように感じられる。それは何かという一と、一つの境地に安住していることを許さぬデーモンに唆かされる風狂漂泊の人の悲劇的な生のありようを暗示しているともいいたらよからうか。序章の「古人も多く旅に死せるあり。予も……片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやまず」や「そざる神の物につきて云々」などとまともに照応して、悲壮感を漂わしている主人公の生き方である。そこに、主人公をそういう人物として描き上げようという作者の強い意図が顔を出している。『おくのほそ道』という作品の主人公は作者である芭蕉その人であると思われているが、実は現実の芭蕉ではなくて、仮構された芭蕉である。即ち芭蕉によって創出され、理想化された風狂漂泊一途の悲劇的な生を生きる一人物なのである。「旅の物うさも云々」という一連の文辞は、こういう、テーマに強く関わっているという点で非常に重要な意味を持つ。うわべを軽く見せながら、内面の重いものを暗示しているという手法は、蕉風俳諧の真髄ともいべきものであろう。

そうした地の文を受ける

蛤のふたみにわかれ行秋ぞ

の句によって一編は完結する。地の文からこの句に渡し込む呼吸は何ともいえない。表面的には「又舟にのりて」の飄然として旅立つ趣を受けて、軽やかに句が据えられる。伊勢を承けて二見へ、海浜水辺の縁で「蛤のふたみ」へとなだらかに移っている。

もともとこの句は木因・如行に舟で送られ、長島での別れに際して詠んだ留別吟である。即興吟であって、さほど推敲を重ねたとは思われず感觸はさりとらしている。後に述べるように手の込んだ掛

詞や縁語などの技巧が駆使されているのだが、それが厭味にならず、軽妙と感ぜられる所にこの句の妙味がある。特に上五から中七へかけての軽妙さは格別である。

「蛤の二見」は枕詞に近い用辞である。本来の「二見」の枕詞は「玉くしげ」である。「玉くしげ」は手箱の美称で、箱には蓋と身とがある所から「二見」の枕詞とされたのである。それを、伊勢（二見が浦）の名産である蛤にも蓋と身（上下二枚の殻）とがあるとして、「蛤の二見」と言ったのであって、「蛤」が古雅な言葉である。「玉くしげ」に対して俗語的なひびきを持っているために、諧謔的な感じが横溢する。秀抜なウィットであり、パロディである。

ところがこの思い付きには実はたねがあった。そのたねというのは西行の歌である。それは『山家集』にある、

今ぞ知るふたみの浦のはまぐりを貝合せとておほふなりけり

で、詞書によると、二見が浦で賤しからぬみなりの少女たちが蛤を集めているのを見たが、それは都で行われる貝合せの材料にするためだと聞いて詠んだ歌だという。貝合せとは二枚に分けられた蛤の殻の合うのを選び合う遊びで、往古上流社会の子女の間でよく行われた。その貝を合せることを「おほふ（覆）」とも言う。貝合せと貝覆いとは元来少し違っていたが、後世この歌で見られるように混同された。歌意は、都で遊ぶ貝合せとはここ二見が浦の蛤を取ってするのだということが今はっきり合点がいった、というような所である。さらっとした歌だが、第二・三句のあたりには潮騒の響きを聞くような感じがあって、なかなかよい。この歌は「（蛤の）蓋・身」——「二見」の掛詞の面白さを中心にして成立している。芭蕉はそれを頭に置いて「蛤のふたみ」と詠み出したのである。ほかならぬ

西行の歌だから感興も一入であったのだろう。

芭蕉のこんどの旅は、西行五百歳忌の年を期して、西行と因縁の深い奥羽北陸の地の巡歴を志して思い立たれたものと思われるのであって、西行追懐は作品『おくのほそ道』における重要なモチーフだったと考えられる。そして西行こそはこの行脚における心の導師であり、又姿を見せぬ重要登場人物であるかのごとき観さえる。それを証するのは、作品本文中に西行を想わせる詞句や記述が或時はあらわに或時は陰微に要所々々にちりばめられていることである。例えば結末に近い所でも、市振の遊女の話や種の浜遊覧がある。結びの地にある「連句塚」の本になった杉風宛書簡には、「硯かと拾ふやくほぎ石の露一の二見での芭蕉の詠句が添えてある。

（連句塚には入れてない）西行が硯に自然石を使ったという伝えによつたもの。西行が芭蕉の頭をどれほど大きく占めていたかを示すものであろう。そういう西行を、その庵を結んだという二見が浦について思い起さぬはずはない。「蛤の二見」が西行歌によつたものであることはまず間違いない。西行の俳をこういう形で見せることで、西行追懐のモチーフを締め括ったのであって、これまた結びの要件の一つである。

さて句の「ふたみに」は「二見に向って」の章。「みに」に「二見を」見るために」の意をも掛けていると注せられているが、西行の歌のことを考慮に入れると、むしろ「蛤の蓋を見に」の意味と取りたいような気がする。風狂の感が出て面白い。だがそれでは余りに複雑にしすぎるきらいがないでもない。掛詞はまだ外にもあるからである。「蛤の」は枕詞的な措辞だが、又これが主語となつて、蛤が蓋と身（二枚の殻）に分けられるという意味が掛けられている

ことは明らかである。貝の二枚の殻の別れというのが離れ難い、辛い別れの譬喩としてよく効いている。譬喩的叙法であることからして、「蛤のふたみに」を「わかれ行」の序詞のように解することも言われているが、しかし「蛤の」が枕詞的になる面白さがあって成り立っているような句であるから、一概に序詞と片付けてしまったのではそれこそ、駄洒落めくが、身も蓋もないことにならう。

又もう一つ「行」が掛詞になる。「行く」と「行く秋」である。「行く」は補助動詞的に取らず、独立した動詞として、ここを去って目的地へ向って旅して行くというように強く取りたい。「行秋」は晩秋を表わす季語、去る秋を惜しむ心情が添う。芭蕉が大垣を立ったのは九月六日(陽曆十月十八日)で、「行秋」にはやや早すぎる感もあるが、別離の句の季語はまさに行秋でなければならぬ。

「行秋」は首途の句の「行春」と、物の裏表のように対称的に照応しているが、行春が青春の悲哀感に通うのに対して、行秋は老年の寂寞哀感を潜める。野ざらしの予感に裏づけられる無限漂泊の生が必然的に遭遇する別離の悲しみを象徴するかのこのようなこの季語の内容を、我他人にじっくり言い聞かすびぎをもつ助詞の「ぞ」で強調し、深い長い詠嘆をもって一句をしめくくっているのである。

この句は先にも言った通り、元来挨拶を含んだ即興吟であったので、そういう名残からか、軽く、洒落れた、飄逸な味を残している。だが、地の文を受け留めた巻末に据えられることによって情況も性格も意味も情感も変ってきた。即ち大垣舟町港頭での大垣の人人全体に対する留別吟となり、ひいては旅としてのこの人生における、すべての人や物に対する留別吟ともなった。行先は伊勢二見にとどまらぬ。未来に向ってしてはしく漂泊する永遠の旅人の面目が

見える。旅に憑かれた人の重ねねばならぬ別れの悲しみを表わし、洒落れた句は尽きぬ悲しみの色に染められる。

漂泊の限りなき行方を暗示する颯々たる余韻の中に一編はしみじみと結ばれる。

首途の「行春や鳥啼魚の目は泪」の留別吟とみごとな照応をなしとげて、「行春」と「行秋」との外に「鳥・魚」と「蛤」との照応もあって、結びとして動かし難い坐り方をしているが、又大垣の章全体が重いものを軽く表わすという叙法を取っている最後を承けて、この句も又重いものを軽やかに表わしている点は心憎いばかりである。

約めて重ねて言う。

美濃大垣を旅の記を結ぶに恰好の地と想い定めて、簡潔を極めた行文の中に、結びの要件の一切を凝縮せしめ、遙かに冒頭部などと照応させ相映発せしめて、一編を完結させた手際は、つまるところ『おくのほそ道』の見事さを象徴しているともいえるであろう。

冒頭部に語り出された中心テーマは、巻末部に来て、再びさりげない形で、しかも的確に浮き上らせられる。これを裏づけ支えるのが、野ざらしの思いと、別離の哀愁と、そしてひそかなる西行思慕の心ということであろうか。

私は、冒頭と併せてこの終章をじっくり味わうことによって、中心テーマ——常住漂泊、一所不住の精神のありよう——をはっきりと理會することができるよう思うのである。

なお、ここで表わされた漂泊無限のイメージは、芭蕉の終焉に臨んでの吟であるあの「旅に病で夢は枯野をかけ廻る」の句のイメージとも相通するものであるように、私は思う。